

## 食に関わる指導力向上のためのプログラム構築の試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006858">https://doi.org/10.14945/00006858</a>

# 食に関わる指導力向上のためのプログラム構築の試み

Program Construction for the Improvement of Dietary Education

村 上 陽 子  
Yoko MURAKAMI

（平成19年10月1日受理）

## 1. はじめに

現在、子どもを取り巻く食の環境は、朝食の欠食、こ食、加工食品の多用化など懸念すべき状況にある。これらは、食生活の乱れのみならず、生活習慣の乱れ、生活習慣病の若年化などの弊害を生み、子どもの心身の健康および人間形成に大きな影響をもたらす。

中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」（平成14年9月30日）によると、子どもの体力は低下傾向が続いており、体力の向上のためには、適切な運動、十分な休養・睡眠、調和のとれた食事という健康3原則の徹底による生活習慣の改善が不可欠である<sup>1)</sup>。また、外食や調理済み食品の利用増大により、栄養バランスや食事の摂り方には正しい知識に基づく自己判断力・調整力・評価力といった自己管理能力が求められる。食品表示偽装問題や中国食品農薬問題など食品の品質や安全性についても同様である。つまり、子どもが将来にわたって健康を維持するためには、子どもに対する食の指導充実と望ましい食習慣の形成促進が必要である。

こうした流れを背景に、平成17年4月、栄養教諭制度が施行された。当初、北海道、福井、大阪、高知の4道府県で導入が開始された本制度であるが、平成18年度にはあわせて25道府県で配置が開始されている<sup>2)</sup>。

また、平成17年6月には食育基本法が成立し（同年7月施行）、同法に基づき政府の食育推進会議において決定された「食育推進計画」（平成18年3月31日決定）では、学校における食育推進のために、栄養教諭の全国配置の促進、学校での食育の組織的・計画的な推進、食に関する指導計画の作成等、指導体制の充実を掲げている<sup>3)</sup>。同計画では、子どもが食について計画的に学ぶことができるよう、各学校において、食に関する指導に係る全体的な計画（以下、「全体計画」）の策定と、関係教職員の連携・協力下での組織的取組みの促進が必要であるとしている。指導にあたっては、関連教科等において、共通の目標のもとで、全教職員が取組むことが必要である。その際、校内で共通理解を図るために用いられる資料が全体計画である。全体計画の作成に際しては、学校教育活動全体において、各教科等の指導内容・方法を生かしつつ教科横断的な指導と関連づけ、体系的に理解させることが重要である。

食育推進計画では、全体計画の作成や、教師との連携・調整の役割を担うものを栄養教諭としている。しかし、栄養教諭（学校栄養職員）による食指導には問題が山積しているのが現状である<sup>4)</sup>。まず、第一に、栄養教諭（学校栄養職員）はすべての小中学校に配置されているわけではない。第二に、学校組織・家庭・地域との連携体制やネットワークが形成されておらず、社会資源利用の視点も欠落している。さらに、職務や配置の問題などにより、個々の子どもと日常的な関わりがもてず、個別指導の遂行が困

難な状況にある。また、子どもの発達段階に応じた学習課題設定の適否、指導内容の偏りなども問題である。

また、児童生徒の望ましい食習慣の形成には、単発的な食に関する知識の教授にとどまらず、実際に経験させつつ習慣化を促すための継続的な指導が必要である<sup>5)</sup>。食指導の基本となる全体計画作成には全教員が関わるべきであり、指導においてもすべての教科で行われる必要がある。そのためにも、各教員が「食育」の重要性を認識し、全体計画作成をはじめとする食に関わる指導力をつけていくことが重要である。

一方、学校における食の重要性が叫ばれている中、特に小学校においては、教員の食に関わる指導力の充実、向上が課題として考えられる。そこで、教育学部、特に小学校教員養成課程において求められるのは「教員の食指導力の育成」である。それには、まず、各教員が食指導者としての役割を担うという自覚をもつ意識改革と啓蒙、他教科と連携していく協力体制の確立が必要である。その上で、食の指導という視点からみた教科のとらえ直しと系統立てが必要である。

そこで、本研究では教員養成課程における食に関わる指導力育成のためのプログラムの構築を目的として行なった。この試みは平成18年4月から静岡大学教育学部家庭科教育専修生を対象に行なっており、現在も進行中である。

## 2. 栄養教諭に関する認識調査

プログラム構築に先立ち、栄養教諭制度に対する意識調査を行なった。調査は平成18年4月14日、調査対象は本大学の家庭科教育専修生（2、3年生）21名である。その結果は、「制度を知っている 0名、知らない 21名」であり、「制度を導入した方がよい 21名、導入しなくてよい 0名」という結果であった。

各教科の中で、家庭科は食指導の核として期待されている。その家庭科専修生においても、「具体的な制度自体は知らないが、栄養に関する専門家を導入した方がよいのではないか」という意見が大半を占めた。また、その理由として「専門的な知識をもった栄養士（栄養教諭）と比べた場合、自分たち（教員）の知識では十分な食指導は行なえないのではないか」、「自信がない」という声が多く聞かれた。

そこで、本制度のしくみを理解するために、学校給食の歴史、学校栄養職員の歴史、栄養教諭の導入の背景、役割、養成状況、配置状況などについて調べ学習を行なった。

その後、再調査を行なったところ、栄養教諭の導入に賛同する声も依然としてあったものの、「学校に常駐していない栄養教諭の食指導は十分といえるのだろうか」、「配置状況や職務の内容からすると、養護教諭の方が子どもの個別指導に向いているのではないか」、「日々子どもとの触れ合いや、発達段階に応じた教育の面からみると、教員の役割の方が大きいのではないか」という意見が出てきた。

以上のことから、教員養成課程において、学校における食指導に関わる制度を十分に理解・検討し、食指導における教員の果たす役割、各教科に期待される役割について考える機会もつことが必要であると思われる。

## 3. 教育プログラム

次に、食指導力の育成および資質向上を目指した教育プログラムの検討を行なった。本プログラムの目的は、①家庭科をはじめとする各教科が食指導に果たす役割を認識すること、②教科連携を考慮でき

ようになること、③食の指導者としての自覚を促し資質を高めることにある。

実践においては、①大学4年間の中で、数年にわたって長期的に行えること、②学習内容を学生の実態に応じて変更できること、③複数学年が参加できること、④異なる学年同士で協同学習ができること、⑤学生の自発的参加を尊重することなどを鑑み、学生の空き時間を利用した自主ゼミの形で行なっている。

参加学生は家庭科教育専修生（各学年14名定員）であり、平成18年度は2年生12名、3年生9名、平成19年度は2年生12名、3年生6名、4年生4名である。

平成18年度、19年度の学習内容は表1のとおりである。平成19年度のプログラムは前年度版に改良を加えたものである。

学習内容であるが、栄養に関する知識を付与するだけでは本プログラムの目的を達成できない。全教科の関わる食の指導を行うには、子ども理解、子どもの発達段階に応じた教育力、および学校全体の教育（幼・少・中・高の継続性も含む）をとらえる視点が必要であり、それには全体計画を自ら構想し、実現できることが重要である。そして、そこには知識だけでなく、教科と教科を結びつけるための柔軟な発想力と対応が求められる。そのため、ブレインストーミングとしてのマインドマップ作り、それを元にした模擬授業、全体計画作成という内容を設定した。

表1 食に関する指導力向上のためのプログラム構築の試み

<平成18年度版>

実施年度	内容	参加学年
平成十八年度（一年目）	1 ガイダンス、自己紹介	2,3年 (平成18年時)
	2 栄養教諭に関するアンケート	
	3 栄養教諭についての調べ学習・発表	
	4 食に関わる全体計画作成【第1案】……個人活動	
	5 " ……グループ活動	
	6 授業構想	
	7 指導案作成	
	8 模擬授業（2年生）	
	9 模擬授業（3年生）	
	10 「食物」をキーワードにした指導要領の読み合せ（小中高，全教科）	
平成十九年度（二年目）	11 キーワード表づくり	3,4年 (平成19年時)
	12 「保育」をキーワードにした指導要領の読み合せ（小中高，全教科）	
	13 「被服」 "	
	14 「住居」 "	
	15 「環境」 "	
	16 「消費」 "	
	17 食に関わる全体計画作成【第2案】	
	18 教材研究	
	19 模擬授業	
	20 食に関わる全体計画作成【第3案】	

<平成19年度版>

実施年度	内容	参加学年
平成十八年度版	1 ガイダンス	2,3,4年 (平成19年時)
	2 マインドマップづくり（キーワード：食）	
	3 " ……交換，加筆	
	4 " （キーワード：野菜）	
	5 模擬授業のテーマ決め	
	6 模擬授業……………3年生	
	7 題材研究，授業構想	
	8 指導案の書き方指導	
	9 指導案作成	
	10 模擬授業（1回目）……………2年生	
	11 模擬授業（2回目）……………2年生	
平成十九年度版	12 食に関わる全体計画作成【第1案】……個人活動	3,4年 (平成19年時)
	13 " ……グループ活動	
	14 「食物」をキーワードにした指導要領の読み合せ（小中高，全教科）	
	15 「保育」 "	
	16 「被服」 "	
	17 「住居」 "	
	18 「環境」 "	
	19 「消費」 "	
	20 食に関わる全体計画作成【第2案】	
	21 教材研究	

※平成19年度現在、3,4年生は平成18年度版のプログラムと19年度版のプログラムの両方に参加している。

## (1) マインドマップ

マインドマップは人間の脳の動きを具象化した視覚的思考ツールの一つで、記憶法、発想法、整理法とも呼ばれる<sup>6)</sup>。その方法としては、あるキーワードを発信源として紙の中心に書き込み、それに関連ある言葉を放射状に枝別れさせる形で繋げ広げていくものである。マインドマップはキーワード(概念)同士の関連づけを明確にし、その連想関係を視覚化することにより、学習、思考、記憶、創作、問題解決をしやすくし、知的活動を支援するとされる。

マップ作りでは、まず各自で作成したあと、友人と交換し、その交換したものにさらにアイデアを加え、さらに自分の考えを書き込むという形式をとった。今回、用いたキーワードは、食生活全体の見直しおよび全体計画作成を想定して「食物」、次に続く模擬授業を視野に入れ「野菜」を設定した。

## (2) 模擬授業

### 1) 目的

模擬授業の実施概要は表2のとおりである。

模擬授業をプログラムに取り入れたのは、①教材作り、授業作りを通して、食指導の重要性やおもしろさを知る、②授業作りを通して、他教科との連携の必要性を知る、③現段階における自らの子どもに対する理解度を認知し、その重要性を知る、④授業の受け手ではなく作り手になることで、学習の深化

表2 模擬授業の実施概要

	平成18年度	平成19年度
参加学年	家庭科教育専修 2, 3年生	家庭科教育専修 2, 3, 4年生
授業者	2年生(1名)	2年生(1名)
支援者	3年生(1名)	個別的には無し
支援内容	指導案の書き方指導	個別的には無し
上級生の役割	*指導案の書き方指導 *評価	*2年生の模擬授業前に、3年生が模擬授業を実施(教材教具、発問、子ども対応など授業作りのポイントを提示) *評価 *2年生全員が模擬授業を終了した後、3年生が教育実習時に作成した指導案を配布
教科	各自で選択(各個人で作成した全体計画の中から選択)	家庭科
学年	各自で設定した学年、校種	校種のみ指定(学年は各自で設定)
学習内容	各自で選択	題材のみ指定(「食品の分類」または「旬」について)
位置付け	導入、展開のいずれかを各自で選択	導入部分
授業回数	1回	同じ内容のものを2回(日数をあけて修正案を実施)
利点	*2, 3年が1組のチームであるため、指導案の書き方指導を直接的・個別的に行える。 *上級生と下級生の協同学習ができる。 *上級生は教育実習で学んだ知識を伝えることで、自分の中により定着させることができる。	*3年生があらかじめ授業を提示しているため、2年生は授業作りをイメージしやすい。 *上級生は公正な目で評価できる。 *授業作りは2年生各自が行うが、先行授業者である3年生との協同学習という意識がある。 *同一校種(小・中)で同一題材を複数で担当しているため、相互比較ができる。また、同じ授業にならないように各自アイデアを出し創意工夫しているため、多様な教材が共有できる。 *同一題材で異なる校種(小・中)を設定しているため、発達段階に応じた学習内容設定の必要性を実感できる。 *系統的学習、段階的学習(学年のつながり)を考える一助となる。 *食(家庭科)の学習の広さを認識する。 *家庭科教員としての自覚を促す。
欠点	*指導案の書き方のみならず、具体的な授業展開まで3年生に依存する学生がいる。 *2, 3年が1組のチームであるため、自分の担当する2年生がうまくできなかった場合、3年生が責任を感じてしまう。 *他の3年生も、同級生に遠慮して公正な評価ができていない。 *家庭科以外の教科を選択すると、専門教科でないために、学習内容が十分把握できず、授業展開が不十分な場合が多い。 *評価者も、家庭科以外の教科の学習内容について、理解が十分でないため、評価が行ないにくい。 *同じテーマでの授業者がいないため、比較がしにくく向上に繋がりにくい。 *家庭科教師としての自覚の芽生えに繋がりにくい。	*指導案の書き方指導が、直接的・個別的には行えない。

が期待できる、⑤現在の知識レベルを認識し、学習意欲を高めるなどの理由からである。

## 2) 実施要領

### ①模擬授業の形態

模擬授業は、その計画時期を3年生の教育実習終了時期に合わせ、本学年生の模擬授業発表から始めた。その授業内容は、教育実習で行なったものである。授業の学年および内容は、A) 中学1年「食品添加物」、B) 中学1、2年「食品の分類」である。その後、2年生が模擬授業を実施した。2年生の模擬授業は、同題材を日数をあけて2回くり返し、それぞれについて評価を行なった。

### ②テーマ

模擬授業のテーマは表3のとおりである。

今年度は家庭科の食物領域の中から「食品の分類」「旬」の2題材に設定し、それぞれにつき小学校、

表3 模擬授業のテーマ

<平成18年度>

テーマ	校種	教科	学年	題材名	キーワード	教材・教具	関連ある教科 (授業の中で 出てきたもの)	家庭科との 関連の有無
食に関するもの	小	学活	1年	食事のマナー	食事のマナー、給食	食事の絵	-	-
		生活	2年	やさいを育てよう	夏の野菜、栽培	野菜の収穫期のプリント、観察カード	-	-
		家庭	5年	おやつについて考えよう	おやつメリット、デメリット、意義	お菓子のパッケージ、胃袋の絵	-	-
		家庭	5年	給食の献立をみてみよう	食品の働き、分類	給食の献立表	-	-
		総合	5年	食材はどこから来るのだろう	食料自給率、輸入、地産地消、旬	-	社会	-
		学活	6年	ダイエットについて考えてみよう	摂食障害、マスメディア	-	-	-
		理科	6年	食べ物の消化吸収・排泄の仕組み	胃、小腸、大腸、仕組みと働き	消化管の絵	-	-
		総合	6年	地域の特産物や郷土料理・行事食を調べよう	食文化、特産物、郷土料理	産物カード、郷土料理カード、ダーツ	-	-
	中	家庭	1年	添加物 ～みんなが食べてる食物の秘密～	添加物、コンビニ、スナック菓子、食生活	ウインナー、食品表示ラベルのプリント	-	-
		学活	1年	スポーツのための効果的な食事	食生活、知識、部活動	-	-	-
学活		1年	ファーストフードやコンビニを賢く利用しよう	ファーストフード、摂取カロリー、栄養素	ファーストフードのメニュー一覧	-	-	

<平成19年度>

テーマ	校種	教科	学年	題材名	キーワード	教材・教具	関連ある教科 (授業の中で 出てきたもの)	小学校・家庭 科との関連の 有無
旬	小	家	5年	旬の食べものについて知ろう！	環境、季節感、ハウス栽培、露地栽培、価格、旬	紙芝居、食品カード	社会、算数、国語	-
			5年	野菜大好き!! 旬の野菜でサラダを作るぞ～旬の野菜の良さを知ろう～	計画的な買い物、価格、味、栄養価、旬	野菜の写真、値段表	社会、算数、国語	-
			6年	旬のものを知ろう	フードマイレージ、世界、環境、流通、旬	世界地図(表示用と個別用)、食材カード	社会、国語	-
	中	庭	1年	旬について考えよう！	ハウス栽培、四季、国土、風土、旬	食品カード	社会、理科、国語	-
			2年	旬の食材を見つけよう！	産地、季節感、栄養、旬のメリット・デメリット	スーパーの写真、旬のカレンダー、果物パネル	社会、国語	-
			2年	旬を知ろう	旬の食材のメリット、デメリット、旬のない食品	旬のカレンダー(トランプ)	社会、理科、国語	-
食品の分類	小	科	5年	食品の色を知ろう	食品の働き、3つの分類	神経衰弱カード、食品カード、人体図	保健体育	-
			5年	食べものはかせになろう！	給食の献立、3つの分類、組み合わせ	食品カード、給食献立表	保健体育	-
			6年	お子様ランチを使って食品群を学ぼう	3つの分類、栄養、食品、バランス、お子様ランチ	お子様ランチセット、食品カード	保健体育、図工	-
	中	科	1年	食品群と栄養素 ～栄養バランスのとれた食事をしよう!～	3つの分類、6つの食品群、五大栄養素、栄養、食品、バランス	本、シチューの食材カード、食品カード、ペーパーサート	社会、国語、英語、保健体育	○
			1年	中学生の栄養と食事	3つの分類、6つの食品群、食品、栄養、栄養素、バランス	夕食メニュー、食品カード、分類シート	社会、理科、保健体育	○
			2年	食品のはたらきを知ろう! ～ようこそ食品の国へ～	3つの分類、6つの食品群	食品カード、ペーパーサート	美術、保健体育	○

中学校と校種を変えた。テーマはくじ引きにより決定し、各校種・テーマにつき、各々3人を割当てた。計画立案・実施は各個人で行なった。授業作りの参考として、小中高の指導要領については各自で用意させ、家庭科・社会・理科・保健体育など関連教科の教科書については筆者が提供した（小学校の各学年、および中・高等学校の各教科）。

③評価方法

評価は、授業者による自己評価、観察者による他者評価（無記名）を行なった。評価内容は、指導案、授業展開などについて自由記述とした。授業終了後、評価票を授業者各自に渡し、読了後に回収した。その後、評価票を印刷して全員に配布した。これにより、授業者、評価者いずれもが他者の評価の視点、すなわち、他の人がどの点に着目しそれをどのように評価したか、また同級生・上級生の評価の相違などを把握できるようにした。

(3) 全体計画

全体計画は、小学校6年間および中学校3年間の合計9年間について、4月～3月までの月ごとに食指導の内容を組み込む形で行なった。参考としてS市<sup>7)</sup>の年間計画を提示した(表4)。

具体的作業として、まず、S市案の気付いた点、改良した方がいいと思う点、新しく追加すべき学習項目について列挙させた。新たな全体計画作成のために、A2大の計画書を1人1枚用意し、教科別に色分けした付箋紙に題材名を書き、各月ごとに計画書に貼付していくという方法をとった。また、S市案にはない新しい学習項目をたてたものには赤いシール(直径8mm)、S市案と学習項目は同じだが教科を変えたものには青いシールを貼ることで、カリキュラム内容の変化の様子を把握できるように工夫した。

表4 小・中学校の各学年年間授業計画例(S市)<sup>7)</sup>

		4月	5月	6月	7月	8月 家庭での実践	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
小学校	1年	初めての給食 (学級活動)	学校検閲 (生活科)	おいしいお茶 (道徳)							給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	2年	野菜を 育てよう (生活科)	やさいばたけ (道徳)	うんちの話 (学級活動)		食事に関わる 手伝い ・はしならべ ・もりつけ ・食器洗い ・買い物 等		食材を知ろう (学級活動)			給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	3年			食事のマナー (学級活動)			好き嫌いを なくそう (学級活動)		わたしたちの 生活と健康 (保健体育)		給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	4年		よくかんで 食べよう (学級活動)	生活習慣を 見直そう (学級活動)				すくすく育 てわたしの体 (保健体育)			給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	5年			作っておいしく 食べよう。なぜ 食べるのだろうか (家庭科)	おやつについて 考えよう (学級活動)	サラダ作りに 挑戦	朝食を通して 楽しい食習 慣を身につけ よう(保健)		リザーブ給食 にチャレンジ しよう (家庭科)		給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	6年		地域の産物や郷 土料理、行事色 を調べてみよう (総合)				食事づくりに 挑戦		生活の仕方と 病気 (保健体育)		給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)	楽しい食事を 工夫しよう (家庭科)	
中学校	1年	給食作りを通 してバランス のよい食生活 (家庭科)		計画した給食を 栄養士さんと 考えよう (家庭科)	ファーストフ ード店やコンビニ エンスストアを 賢く利用しよう (学級活動)		1食の給食を 作ってみよう (家庭科)			調和のとれた 食事 (保健体育)	給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	2年	食生活を振り返 ろう。加工食品 を作ってみよう(家庭科)		加工食品の良い 点、気を付ける 点(家庭科)	これからの食生 活を考えよう (家庭科)		ダイエットに ついて考えて みよう (学級活動)			望ましい・ 食生活 (学級活動)	給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		
	3年				スポーツのため の効果的な食事 (学級活動)					調和のとれた 生活と生活習 慣病(保健)	給食に関わ てくださ る人々に感謝し よう(学活)		

## 4. 結果

### (1) マインドマップ

マインドマップ作成により、アイデアを広げていくことで発想力を伸ばすと同時に、何が分かっていて何が分かっていないのかという、現在持っている知識の洗い出しが可能となる。最初はやり方に戸惑っていた学生も、すぐに慣れ、樹形図を発展させていった。さらに、他者のアイデアを加えていくことで自身の固定概念を打破することに繋がった。また、こうしたマップづくりを繰り返すことで、発想力の獲得の訓練となると思われる。

### (2) 模擬授業

#### 1) 3年生による模擬授業

3年生への模擬授業の依頼は教育実習中に行なった。模擬授業を2年生に行なうことについて、3年生にとっての利点として、自身に対するものとしては、①予め依頼を受けることで心構えが出来る（教材の持ち帰りなども含む）、②下級生に授業をすることで自信がつく、③再度授業することにより自己の振り返りができるなどがある。また、同級生に対しては、教材の共有化と相互比較による授業力向上、2年生に対しては、アドバイザーとしての歩み寄りがあると考えられる。

また、2年生にとっても、身近な存在である上級生の授業を観察できることは大きな刺激となった。さらに、教材教具の作り方や使い方、板書方法、発問の仕方、子供たちとのかかわり方などを具体的に聞くことができたため、模擬授業に対するイメージがわきやすかったとしている。これらは、続く教育実習（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）への不安解消だけでなく、教職への意欲高揚に繋がるとと思われる。

また、上級生による模範授業をあらかじめ実施しなかった昨年度と比べると、今年度は教材・教具の取組みやワークシート作成などに、より積極性が見られた。

#### 2) テーマ

##### ①平成18年度

食指導における教科の関連性を理解するために、まず教科の横断的・縦断的連携を考慮した全体計画を作成し、その中から模擬授業を行なった。学年、教科、題材については自由選択としたため、家庭科以外の教科を選択する者が多かった（表3）。

これは、学生の自主性を尊重できる反面、家庭科以外の教科を選択した場合、評価者がその教科・題材に対して理解が十分でないため、何をどのように評価すればいいのか分かりづらく、評価の視点が定まりにくいという問題があった。特にその傾向は2年生に見られた。また、題材が全員異なるために他者との相互比較ができず、授業の再構成など困難な様子であった。

##### ②平成19年度

今年度は、教科を「家庭科」、テーマを「食品の分類」「旬」の2題材に指定した。これは、食に焦点を当てることで、①食に対する関心を高めると同時に、②食の知識を深める、③あとに控える教育実習のみならず、教員になったときの糧とする、④早い段階から食指導のあり方を意識化することを目指したからである。

さらに、1つのテーマを複数人数が行うことで、その題材の内容について学生同士が教え合うという協力が見られる一方で、それぞれ異なるアイデアを出すという創意工夫と、同じ題材であっても他人とは違う授業を作ろうという競争心が芽生えた様子が見られる（表3）。



実際、校種の違いはあるものの、1つの題材（たとえば「旬」）について6人が担当したことになる。しかし、いずれの場合も、教材が似通ることがなく、展開も多様であった。このことから、①自分自身のアイデアを生かすことの重要性、②他者の授業と自己のそれを比較することによる授業の向上と評価視点の多様化を学んだと思われる。

さらに、同じ授業を2回くり返すことで、自分の授業を振り返り、反省点や指摘された点を修正し、改善・発展へとつなげることができた。

### 3) 指導案について

模擬授業自体は本プログラムの目的ではなく、あくまで食に関する指導力をつけることの1つの手段である。

昨年度は、2年生は模擬授業の内容の検討に入るよりも、指導案作成の段階でつまづく傾向にあった。たとえば、「題材の目標と本時の目標の違いや書き方が分からない」、「学習活動を具体的にどう書けばいいのか分からない」などである。その問題解決のために、2年生と3年生が2人1組となり、3年生が支援者として指導案の書き方指導を行なった。これは協同学習ができるという反面、2年生が3年生に依存し過ぎたり、評価の際に3年生が同級生に遠慮して公正な評価が行ないにくかったりするなどの問題点があった（表2）。

そこで、本年度は、3、4年生を完全に独立した評価者として位置付け、指導案は2年生各自で作成することとした。これに先立ち、「何を学ばせたいか。この題材の具体的な学習内容は何か。関連する教科は何か」など、題材について学習する時間を設けた。学習内容をまず明確にし、把握しておくことで、授業の中でそれをどのように教えれば（考えさせれば）よいか、そのためにはどんな教材を使えばいいかなど、授業の構想を練ることができた。その上で、指導案作成の概要を説明した。また、指導案を書く前には、具体的な授業の構想（授業の位置づけ、目標、授業の流れ、発問、予想される子どもの様子、教材教具、板書計画なども含む）についての相談（報告）時間を設けた。この構想案が十分に固まってから指導案に取り組むようにした。

完成した指導案には基本的には修正を加えず、そのまま授業時に配付した。これは、①指導案の書き方がこのプログラムの本質ではないこと、②2年生にとって初めての模擬授業であること、③学習の流れ、すなわち、授業の位置付けやその流れ、他教科との連携、家庭学習の必要性、家庭や地域との連携の重要性に気付く手がかりとして導入したこと、などの理由によるものである。また、意図的に修正を入れないことにより、指導案の書き方が不十分であることに気付いた3年生から、指導案の書き方に関する資料の提供があるなど、上級生からの自主的な支援が見られたことも予期しない成果である。

### 4) 他教科との連携

表3は模擬授業の内容である。

家庭科は多くの教科と関連をもつという特性から、授業づくりの中で他教科との繋がりを見出している。たとえば、「栄養素の働き」の中では理科の「消化・吸収」、「旬」の中では社会の「地域による主食の違い」「フードマイレージ」「農産物の生産」などに繋げている。これにより、1つの教科の中でも他教科の学習内容の把握が必要であり、それらを統合することで学習効果がさらに高まるという自然な気づきが見られる。

## 5) 評価票を通じた協同学習

### ①評価の視点の移行

模擬授業に対する評価は評価票により行なった。表5は評価票のコメントを一部抜粋したものである。この評価票により、さまざまな学習効果が得られている。

まず、2年生と上級生で比較した場合、1～2回目くらいまでは上級生のコメント量が多く、内容的にも具体的なアドバイスであったり励ましの言葉であったりした。それとは対照的に2年生のコメントは比較的短いものであり、具体的な記述はあまり多くはない。たとえば、最初に行なわれた授業の板書について、2年生は「すっきりしていた」、「みやすい」、「黒板を広く使っていた」と評価しているが、3年生は「黒板が広々使っていて、最後に見てもまとまっていて、子どもも視覚的に理解しやすいです」などと記述している。

また、2年生の中では、授業未了者と終了者との間で評価の内容に相違が見られる。前者であるが、教師の立場としてというよりむしろ授業の受け手としての立場からのコメントが多い。「楽しい」、「分かりやすい」など、評価というより感想に近い。また、受け手としても、その設定学年の児童・生徒の立場にたったものというより、「大学生」としての視点であるため、発問や教材の適否の判断が十分とはいえない。

一方、後者は細かい指摘ができるようになっていく。「ほしい答えがないときは、ヒントを与える」など具体的なアドバイスができていく。また、「生徒を中心にした授業を作るにはどうすればいいのか」ということに視点移っており、教師としての視点から授業を捉え、考えられるようになっていく。

こうした変化は自分自身の反省によるところもあるが、上級生からの評価コメントの影響も大きいと考えられる。つまり、授業終了者は、評価票、特に上級生からの評価を通して、どういう視点で評価すればいいのかを理解・把握し、自分の反省も含めて他者を評価できるようになっている。まだ授業を行っていない人にとって、評価票は授業のどこが注目されているか、またどう改善すればいいのかを教えてくれるものであり、さらに他の人が指摘されている事項を自分の授業に生かす際の道標になっている。たとえば、模擬授業の最初の実施者（小6年「旬のものを知ろう」）に対して、上級生は「板書は子どもの考えを認め受け入れることになり、子どもの自信となるため、板書をする」とアドバイスしている。それを受けて、次回以降、「児童が発表したものは消さないで残しておいてあげたい。消されると、少し悲しい」、「児童の意見を消さずに、先生の意見を書いた方がいい」、「生徒の意見をひとつひとつしっかり板書してくれるところが良かった」というコメントが2年生の中に見られるようになっている。

つまり、評価票は、①授業をよりよくすること、すなわち授業者として求められる資質を上げる効果と、②何をどのように注目していけばいいのかという、評価者としての資質を上げる効果の2つの効果をもたらしているといえる。

### ②新しい授業構想

評価を行なっている3、4年生の中には、新しい授業構想を考案する者もいた。たとえば、『おもに体をつくる』『おもにエネルギーになる』『体の調子を整える』とはそれぞれどういうことなのか、案外子ども達は分かってないから、考えさえるのも面白いかも。やった方がいいかも（小5年「食べものはかせになろう！」）、「私が思い付いたのは、自由に分けさせた後、赤・緑・黄を先に示して、どういう食品がくるか子ども達に分かるように説明してから、その基準でもう一度子ども達にグループ分けさせたらどうだろう、と思いました。それで分からなかったところとか、間違えたのを中心に定着させるとか」（小6年「お子様ランチを使って食品群を学ぼう」）などである。

表5 評価票からのコメント例

評価の視点	評価部分	記述例	評価者	評価授業
子どもを中心とした授業づくり	導入	*子どもの発言から授業に入ることで、この1時間は子どもの自発的・積極的な授業になることが考えられ、とても良い。 *まず最初に目標を板書したところが良いね、見通しをもつことができると深い内容になる。「昨日何食べた？」という質問は生活に沿って考えてやすくて、いい。	4年	小5年 「食品の色を知ろう」
	展開	*急速、子どもから出た意見にも対応できており、個を尊重できる授業になっていた。 *子どもの出した意見から広げる展開ができていた。 「パンには何をぬる?」「味噌汁とかは?」など。	4年	
	展開	*子どもの意見を聞く時間をもう少しとっていいかもしれない。 小学生には少し難しいかもしれないので、ヒントを与えてあげてもいい。	3年	小5年 「食べものはかせになろう!」
	展開	*教師が答えを全部言ってしまうのではなく、子どもたちに答えさせた方が、子どもと教師で授業を作っているのが良いと思います。	3年	小6年 「旬のものを知ろう」
	展開	*子どもの意見に反応してあげよう。板書は子どもの考えを認め、受け入れることなので、子どもにとっては「嬉しい」という自信となるため、板書しよう。	4年	
	板書	*最初に食材カードを貼った子どもの意見を大切に。 何か考えがあって、そこに貼ったのかもしれないので。	3年	
	展開	*旬という言葉子どもたちの中から出させるところがよかった。 子どもたちにヒントを与えながら進めることで、生徒と授業を作っているという印象がもててよかったです。	3年	中1年 「旬について考えよう!」
	展開	*子どもが(カードを)貼り終えていないときに、答えが間違っていることを言っ てはいけない。むしろ、間違えた方がみんなで確認できるので、都合がいい。 正解することが良いのではない。	4年	中2年 「食品のはたらきを知ろう!」
	展開	*生徒にいっぱい質問をしているところがいい。すぐに答えを言わず、ヒントを出しているところがすごく良い。 子どもの回答に丁寧に答えていていい。分類するときに考えさせるところがいい。	2年	中1年 「食品群と栄養素」
	展開	*全部の意見を大事にして、「今日注目するのは～」と取り上げるのが良い。	2年	中2年 「旬の食材を見つけよう!」
展開	*答えを先生がすぐには言わず、ヒントを出して生徒から引き出すのがよいと思 いました。生徒に自分で考えさせる時間が多くてよかったです。	2年		
授業づくりの工夫	板書	*まず、本時の内容を板書できたことがよい。単純なことだけれど、とても重要な 一行になる。	4年	小5年 「食品の色を知ろう」
	教材	*思いがけない意見用のサブカードを用意していてすごい。子どもは自分の意見が 認められたみたいで嬉しい。神経衰弱のゲームが工夫していい。	4年	
	板書	*黒板が広々使っていて、最後に見てもまとまっています。子どもも視覚的に理解しや すいです。	4年	小5年 「旬の食べものについて知ろう」
	板書	*本時の指導内容、学習内容を初めに板書すると子どもたちが何をやっているのか わかりやすい。板書+教材がいいかな。	4年	小6年 「旬のものを知ろう」
	板書	*食品パネルを手作りでかわいく作ったり、班ごとに地図を配ったり、子どものやる 気を引き出させるものだったと思います。	3年	
	板書	*食品の名前の紙は、板書してもいいかもです。食品カードを探すためにずっと教卓 の所にいないといけませんので、子どもの方に近づけないのが残念です。予想しない 答えが出た時に焦らないかも。 (カードを)動かしたとき、どの食品がどの料理のものかや、重複するものがあっ て、ちょっと分かりにくい。子どもが貼る用として(別に)用意するとよい。	3年	小6年 「お子様ランチ を使って食品群 を学ぼう」
準備の大切さ	展開	*子どもから出た意見で答えられないときの対処法を考えておくといいね。 ちゃんと受け取ってあげないと、子どもは未消化のまま終わってしまいます。 子どもの疑問は大切にしたいね。	3年	小5年 「食べものはかせになろう!」
	展開	*分類させる食材は用意しておくべきだと思う。時間がかかるし、うるさくなって まとまらなくなってしまう元だと思う。 用意できるものは用意しておく。そうすることによって時間短縮できるし、子ども の学びも増える。	3年	小6年 「お子様ランチ を使って食品群 を学ぼう」
	展開	*生徒の思いがけない質問にもしっかり答えられている。 「正解」と言われると嬉しい。 *質問に、適切にしっかり答えられているところが良い。	2年	中2年 「旬を知ろう」
子ども理解	発声	*5年生でも騒がしかったりするので、もう少しハキハキ前を向いて発声するとい い。	3年	小5年 「食べものはかせになろう!」
	発声	*小学校6年生だと、原材料が何かは全く分からないに等しいと思う。 だから、思うように進まないことを想定しておくといいと思う。	3年	小6年 「お子様ランチ を使って食品群 を学ぼう」
	発声	*中学生は小学生に比べると発言が少ないです。その対応も考えておくといいね。	3年	中2年 「旬の食材を見 つけよう!」

このように、直接アドバイスされた2年生だけでなく、授業の観察者・評価者である3、4年生にも新しい授業構想が生まれ、さらにこれらをすべての人が共有できるという利点がみられる。

### ③指導案の書き方

指導案の書き方は、評価票の中で上級生が指摘している。特に教育実習直後の3年生にその傾向が強く、指示も具体的である。以下、例を挙げる。

- ・目標の「理解させる」のは言ってみれば先生にとっての目標。子どもの目標（本時でできるようになること）だから「〇〇がわかる」とか「～できるようになる」とか。
- ・目標は1つにしぼると良い。
- ・目標は具体的に書いた方がいいかな。「旬がどのようなものか知り、そのメリットが分かる」とかね。考えて詳しくなったことで子どもは何が出来る、何が分かるようになるのか。「詳しくなる」「考える」では、達成されたかの評価判断ができない。自分も授業の流れを作るときに、その目標に向けて流れを作る。そのためにも「詳しくなる」「考える」だと流れが作れない。
- ・学習内容の書き方の確認を。支援上の注意も具体的に書く。たとえば「意見が出やすいように声かけをする」では、具体的にどんな声をかける？
- ・活動内容には、自分が重要と考える発問を書く。その後予想される子どもの表れを書く。
- ・四角の枠（□）や番号が使われていて見やすいです。子どもの発問を中心に書いてもいいと思います。
- ・発問と子どもの反応を書こう。
- ・発問は会話ではなく、「〇〇しよう」とか「～考えよう」などの形にするといい。

これらは一例であるが、こうしたアドバイスを受けて、指導案の書き方も回を重ねるごとに次第に精練されていった。

## 6) 全体計画作成

模擬授業を重ねる中で、家庭科との学習内容（特に食）を他教科での学習内容に結びつける発言が増えていった。たとえば、「社会科で、世界には芋を主食とする地域があることを習ったよね」（社会）、「理科で、消化吸収について習ったよね」（理科）、「旬という言葉に定義付けてみよう」（国語）、「組織という言葉の意味は何だろう」（国語）などである。

他教科との学習内容との結びつきに気付き、その重要性を認識したところで、S市の食育指導の年間指導計画（表4）を参考例として配付し、各自で年間指導計画をたてることを課題とした。

本年度は現在作成中であるため、昨年度作成したものを表6に示す。

2年生の計画案は参考としたS市のものを大きく訂正するには至っていない。学習項目について、学年や教科を変えてはいるが、新しい学習項目はあまり増えておらず、関わる教科も少ない。さらに、計画の段階で、学習すべき内容、たとえば「給食作りをとおしてバランスのよい食生活（家庭科）」、「食生活を振り返ろう。加工食品を作って比べてみよう（家庭科）」などが消えている。また、教科と学習内容の整合性がなく、系統的学習ができているとはいえない（例：中2年「調和のとれた食事」が保健体育に設定されている）。

3年生の計画案では、ほとんどが新しい学習項目であり、関連する教科も増えている。ここには載せていないが、連携する主要な教科は作成者により異なっており（社会、総合、理科、体育など）、これにより学習項目や指導計画に個性が現れている。

ただし、これはあくまで素案であり、いずれの場合もさらなる修正が必要である。この点は学習者自

身も自覚しており、作成過程において、各教科の学習内容の把握（履修学年も含む）および子どもの発達段階の理解・把握の必要性に気付くようになることが、昨年度の実施から明らかになっている。その必要性を十分認識した段階で、「食」をキーワードにして学習指導要領（小・中・高）の読み合わせを行い、指導要領の中に見られる教科の繋がりについての学習を継続して行なっている。

読み合わせの中で、食に関する内容が直接的に記述されたものもあれば、間接的に関連のある記述もあり、改めて「食とは何か」、「食指導における家庭科の役割とは何か、他教科の役割は何か」、「食指導

表6 全体計画案（平成18年度）

<2年生案>		4月	5月	6月	7月	8月 家庭での実践	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
小学校	1年	初めての給食 (学級活動)	学校探検 (生活)	食事のマナー (学級活動)	夏休みを楽しく 過ごすために (学活)	食事に関わる 手伝い ・はしならべ ・もりつけ ・食器洗い ・買い物 等	好き嫌いを なくそう (学級活動)	よくかんで 食べよう (学級活動)	おうちの人と 給食を食べよう (学活)	おやつについて 考えよう (学級活動)		給食はどこから 来るの？ (学級活動)			
	2年		やさしいばたけ (道徳)	野菜を 育てよう (生活科)	夏休みを楽しく 過ごすために (学活)		野菜を収穫 しよう (生活)	サラダを 作ろう (学級活動)		うんちの話 (学級活動)		給食の献立を 見てみよう (学級活動)			
	3年	おいしいお茶 (道徳)	お茶つみ体験 (学級活動)		夏休みを楽しく 過ごすために (学活)				食材を知ろう (学級活動)	食べ物が入るまで (理科)			給食センターの 方々と会食しよ う(学活)	給食に関わっ てくださる 人々に感謝し よう (学級活動)	
	4年		なぜ食べるの だろう (学級活動)	望ましい 食生活 (学級活動)	食事はだれが 作るの？ (学級活動)			生活習慣を 見直そう (学級活動)	わたしたちの 生活と健康 (保健体育)			給食センターの 見学 (学級活動)			
	5年	すくすく育て わたしの体 (保健体育)					食事づくりの 手伝い		ダイエットに ついて考えよう (保健)	おやつにつ いて考えよう (学級活動)	おやつを作 ってみよう (家庭科)		給食センターの 方々に話を聞 こう		
	6年		郷土文化を 調べよう (総合)	地域の産物や 郷土料理、行 事食(総合)	食文化学習 (家庭科)		食事作りに 挑戦	生活習慣を 見直そう (学級活動)	生活の仕方と 病気 (保健体育)			楽しい食事を 工夫しよう (家庭科)	食事パーティを しよう (学級活動)		
1年	朝食を通して 望ましい食習慣 を身につけよう (保健)	スポーツのた めの効果的な 食事 (保健体育)	疲労回復料理 を作ろう (家庭科)			ファーストフ ード店やコンビニ エンスストアを 賢く利用しよう (学級活動)	加工食品の良 い点、気を付 ける点 (家庭科)	望ましい 食生活 (学級活動)							
2年				ダイエットに ついて考えよう (保健)			調和のとれた 生活と生活習 慣病(保健)	調和のとれた 食事 (保健体育)	1食分の食事を 作ってみよう (家庭科)				これからの食 生活を考えよう (家庭科)		
3年			栄養的特質 を知ろう (家庭科)	1日の献立を 考えよう (家庭科)	家族の食事を 作ろう				1食の給食を 作ってみよう (家庭科)	計画した給食 を栄養士さん と考えよう (学級活動)	給食に関わっ てくださる人 々に感謝しよ う(学級活動)	会食しよう (家庭科)			
<3年生案>		4月	5月	6月	7月	8月 家庭での実践	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
小学校	1年	初めての給食 (学級活動)	学校体験 (生活)	よくかんで 食べよう (学級活動)	夏休みの 過ごし方 (学級活動)	食事に関わる 手伝い しよう	生活リズムを 見直そう (学級活動)	畑やたんぼで 働く人を描こう (図工)	秋の食べ物を 探そう (生活)	風邪に負けない 生活習慣 (保健体育)	お肉屋さん に行ってみよう (生活)	お魚屋さん に行ってみよう (生活)	どれくらい成 長したかな (学級活動)		
	2年	調理のしかた (生野菜をち ぎる、切る) (生活)	夏野菜の栽培 (生活)	地域の畑マ ップを作ろう (生活)	作った野菜を 味わおう (学級活動)	食事に関わる 手伝い しよう	さつまいも農家 の人の話を 聞こう(生活)	いもほり、 焼き芋大会 (生活)	いもほり、焼 き芋大会の思 い出(図工)	お正月料理に ついて (生活)	どんどこきに 参加しよう (総合)	だれかのため にお弁当を作 ろう(図工)	食事を作っ てくれる人 に感謝しよ う(学級活動)		
	3年	朝食の食卓の 絵を描こう (学級活動)	朝食の大切さ について (学級活動)	理想の朝ご 飯の食事を描 こう(図工)	食物の流通 (社会)	サラダ作り に挑戦	スーパーマ ーケットで働く 人(社会)	食材を買 う人になっ てみよう(社会)	冬野菜の 植え付け (総合)	風邪に負けない 体作り。食 生活(保健)	冬野菜の収穫 (総合)	冬野菜を使っ て親子で料理 (総合)	ごはんを残す ことについて (学級活動)		
	4年	正しい生活 習慣、3食し っかりしよう (保健体育)	ダイエットに ついて (保健体育)	生活リズム (学級活動)	日本の産業 漁業、農業 (社会)	農家の仕事 1日体験	農家の仕事 (社会)	農業。食べ 物の旬とは (社会)	環境問題 (総合)	ゴミ問題 (総合)	リサイクル (図工)	未来の食卓を 描こう(図工)	どれくらい の食べ物が 捨てられる のか(学級活動)		
	5年	ガスコンロ、 調理器具の 使い方 (家庭科)	おいしい静岡 茶を入れて みよう (家庭科)	朝食を通した 望ましい 食習慣 (保健体育)	おやつにつ いて考えよう (学級活動)	おやつを 作ってみよう	秋の食材料 理 (家庭科)	旬の食材の よさ (家庭科)	郷土料理、 行事食 (社会)	郷土料理、 行事食を地 域の人とつ くる(家庭科)	食材はどこ から届く？ (社会)	日本の食料 が危険？ (社会)	お米を 食べよう (学級活動)		
	6年	食事のときの 絵を描こう (道徳)	地域の食材 について調べ よう(総合)	フィールド ワーク (総合)	家族のための 食事作りの計 画(家庭科)	家族に食事を 作って一緒に 食べよう	地域の食材を 生かした新メ ニューを企画 しよう、PR しよう(総合)	地域の食材の 新メニューを 作る(家庭科)	給食に関 する新聞を 作ろう(社会)	楽しい食事を 工夫しよう (家庭科)	友だちとの 食事会 (家庭科)	地域の高齢 者と触れあ おう(学級活動)			
中学校	1年	食品の栄養 素、中学生に 必要な栄養 (家庭科)	現代と昔の 中学生の 食生活比較 (社会)	家庭の食事、 地域の食事 作り(家庭科)	果の食事、 日本の食事 作り(家庭科)	食事記録を つけて食生活 を見直そう	冷凍・加工・ レトルト食品 (総合)	加工食品を 作って比 べてみよ う(総合)	サプリメント ・栄養補助 食品 (家庭科)	おせちにつ いて (学級活動)	高齢者の食 事(家庭科)	情報番組が もたらす影 響(保健体育)	食品添加物 を知ろう (家庭科)		
	2年	バランスの よい食生活 (家庭科)	お弁当を 作ってみよ う(家庭科)	食物 アレルギー (総合)	食の問題を 知ろう (総合)	運動と食事 のバランス を記録しよう	子どもの食 事(家庭科)	家庭から出 るゴミ、環 境問題(社会)	エコクッキ ング(家庭科)	世界の農業 (社会)	守るべき 日本の農業 (社会)	日本の食文化 と世界の食 文化(総合)	世界の料理 を作ってみ よう(家庭科)		
	3年	健康な食事、 運動、生活 (保健体育)	調和のとれた 生活と生活 習慣(保健)	頭がよく なる食 事(家庭科)	受験生とし ての夏休 みの生活 (学活)	気分転換に 料理を作 ろう	女性の社会 進出、家事 の便利化 (社会)	コンビニ、 中食 (学級活動)	表示制度 ～BSE問題～ (社会)	貿易と安全 性～中国野 菜～(社会)	受験に向けた 体づくり (学級活動)	どれくらい 成長したか な小1～中 3(学級活動)	家族に感謝 を込めて食 事を作 ろう(家庭科)		

注1) 実際は、教科別に色分けした付箋紙で作成した。

注2) 網かけ部分は、新しく立てられた学習項目を表している。

の課題は何か」と考え直す機会にもなっている。こうした学習を通して、食に関わる教科の繋がりや広がりを実感し、学校教育全体を見通す視点が養われる。

現在は、食領域だけでなく、他領域（保育、被服など）まで学習領域を広げている。他領域を取り入れたのは、生活は食だけで成立しているわけではないこと、家庭科教員としての資質向上、繰り返しによる知識の定着（繰り返し読むことで、見落としていた部分を追加できる）、他領域と他教科との関連性の発見などの理由による。

#### 4. 成果と課題

食の問題は食だけにとどまらず、生活全体の問題である。食指導は毎日行われるべきものであり、子ども理解はもとより、子どもとの信頼関係の確立なくしては行えない。そのためには日々の観察・交流が必要である。昨年の調査<sup>4)</sup>によれば、栄養教諭（学校栄養職員）に期待されている食指導は、実施面でも効果面でも困難な状況にあるといえる。つまり、現在、学校においては教科教諭の食指導力の向上が危急的課題である。

本研究では、食指導について各教科が関わることの意義、連携することの大切さを知ることを目的にプログラム構築を試みた。ブレインストーミングとしてマインドマップを導入し、模擬授業、全体計画作成へと繋げた。

異なる学年同士の協同活動や、食教育への関心の喚起を目的として、模擬授業を行なった。ここでは、授業作りの大変さと同時に面白さを知り、食指導の意義、家庭科の果たす役割を知るきっかけにもなったようである。

この中で、評価票を活用した。今回は、評価票を配布するという活動にとどまったが、模擬授業を活動の主眼とした場合は、授業者に対して評価票から何が得られたかを再考するという振り返りの過程を課すことで、授業作りのさらなる向上に繋がると考えられる。これは、教育法の指導の中での活用が期待できる。

評価票を通じた学習はここだけにはとどまらない。家庭科では、教育実習に先立ち、「家庭科教育特講Ⅱ」の中で学校現場への観察学習を行なっている。こうした体験学習の前に、あらかじめ評価の方法、評価の視点を得ることで、こうした学習にも大きな影響を与えられる。

全体計画作成の学習では、教科連携の重要性のみならず、各教科のもつ特性や発達段階の把握などの理解が必要であることを知る一助となったと思われる。

課題としては、まず、本プログラムが単位化されていないことがある。しかし、だからこそその自由度があるともいえる。たとえば、今年度のように3年生の模擬授業を先行実施できるなど、その特性により役割を決めることができる。さらに、2年生から4年生までが参加し、その中で協同学習が行われている。学習課題を学生の実態に応じて変更したり、学習時間に余裕を持たせたりすることができることも利点の1つである。また、学生にとっては、成績評価を気にしなくていいということで、自由な発想で実施できていると思われる。

第二に、参加に関しては全くの自主性にゆだねているため、拘束力がないことが挙げられる。つまり、本プログラムは学生の意欲如何にかかっており、より多くの学生の学生参加を促すために、学生の興味・意欲・関心を喚起する学習プログラムの開発が求められる。

第三に、現在のところ、対象が家庭科教育専修のみに限られていることである。本来であれば、他専修の教員志望者の参加が望まれる。今後はこれらの課題をふまえて、効果的、且つ、より魅力ある食指

導育成のためのプログラム構築を進めていく必要があると思われる。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 文部科学省 (2004) : 「食に関する指導体制の整備について (答申)」、  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04011502.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04011502.htm)
- 2) 内閣府 (2006) : 「第2章 学校、保育所等における食育の推進」(平成18年版食育白書)、  
<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/data/whitepaper/2006/book/html/06sh0202010.html>
- 3) 内閣府 (2006) : 「食育推進基本計画 (本文)」、  
<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/more/plan/pdf/kihonkeikaku.pdf>
- 4) 村上陽子 (2007) : 「静岡県教育研究会学校給食研究部における食に関する指導の状況」、静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学篇)、第38号、pp.155-170
- 5) 文部科学省 (2007) : 「食に関する指導の手引き」、  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/07061818.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/07061818.htm)
- 6) トニー・ブザン、バリー・ブザン (2005) : 『ザ・マインドマップ』(神田昌典訳)、ダイヤモンド社 (原著2000年)
- 7) 裾野市立小中学校 : 平成16年度「学校給食における学校・家庭・地域の連携推進事業」教科・道徳・特別活動・生活科・総合的な学習の時間 学習活動案綴り (2004)